The Great Awakening : Event and Exegesis

Edited by Darrett B. Rutman. New York: John Wiley & Sons, 1970

大　下　尚　一

Great Awakening（大覚醒）についての本書は研究書ではなく，大学生向きに編集された歴史シリーズの一冊であるが，アメリカの思想あるいは文化に対する史的研究の関心を知るうえで，興味深い。大覚醒はある意味で非常に特殊なテーマであり，わが国のアメリカ研究者の間ではそれに対する関心はいたって限られているので，本書を手がかりにして，大覚醒がアメリカではどのような意味で興味をもたれているか紹介しておきたいと思う。

さて大覚醒とは，17世紀の30年代後半にアメリカ植民地で起こり，40年代の半ばまで各植民地を席巻した信仰復興（revival）の運動である。この熱烈な宗教運動は，19世紀のアメリカ宗教の特徴である信仰復興の最初の現象として宗教史研究の一テーマではあったが，植民地時代の研究全般の中では重要なテーマではなかった。社会史的関心から，大覚醒の社会的解釈を試み，アメリカ独立革命前史にそれを位置づけようとする努力は，ときどき試みられてはいたが，それも広い関心をよぶものとは言えなかった。ところが，本書のように，「アメリカ憲法」や「独立革命」あるいは「1898年の帝国主義」「冷戦の起源」といったアメリカ史上の重要なテーマを扱かったシリーズの中に〝大覚醒〟の一巻が含まれるようになった。このこと自体，注目に値すると言えよう。

実は大覚醒がこのようなシリーズの一巻となったのは本書の場合がはじめてではなく，最近のことではあるが，すでに見られる傾向である。実は本書をとりあげたのも，本書以前に大覚醒のアンソロジーが二種のアメリカ史史料シリーズの一巻として刊行されているからである。Alan Heimert and Perry Miller, eds., *The Great Awakening: Documents Illustrating the Crisis and its Consequences* (Indianapolis and New York, The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1969)；David S. Lovejoy, ed., *Religious Enthusiasm and the Great Awakening* (Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1969). 前者は The American Heritage Series に，後者は，American Historical Sources Seriesに含まれている。大覚醒についての研究書が少ない現況では，本書を含めてこれら三冊が大覚醒を知るうえで大いに役立つであろう。とくに Alan Heimert と Perry Miller の編集になるものは，学生のテキストという以上に，広範に多く

の史料を含んでいて，研究の便に供するところ少くない。

さて，この三冊を見ると，大覚醒に関する関心がどのような意味で大きくなってきたか明らかになる。大覚醒は社会的関心の対象としてとりあげられたことはすでにふれたが，それ自体では特殊な植民地史の一テーマの域を出なかったのであり，それがより広い関心を呼ぶようになるのは，やはり思想史，またはインテレクチュアル・ヒストリーに対する関心の高まりとあいまつことになるのである。いま一つ指摘しなければならないのは，この思想的関心ときりはなせないことであるが，ニューイングランド・ピューリタニズム研究の成果と結びついて，大覚醒への興味が高まったことである。これはあまりに当然のことのように思われるが，ピューリタニズム研究の一つのテーマとして大覚醒が研究されてきたというよりも，ニューイングランド・ピューリタニズムの研究の結果として，大覚醒が問題になるようになったと言った方が適当であろう。この点を Rutman 編の本書がよく示してくれる。本書は，先に出た二冊が同時代の史料とその解説によって構成されているのに対して，同時代の史料の第一部と，大覚醒の評価についての諸見解を集めた第二部から成っている。すなわち，Eventの部と，Exegesis の部である。この第二部には，ごく最近の研究成果も含まれており，大覚醒評価についての代表的見解がよくわかる。さらにそれらを通して，ニューイングランド史研究の関心と研究方法が相即して変遷してきたことを知ることができる。本書の読者にとって幸いなことに，編者 Rutman は，今日のピューリタニムズ研究の第一線でたえず問題提起的業績を著わして活躍している歴史家であるが，彼には方法論的関心が大きく，本書の序文における解説は，非常に興味深い。

さてアメリカ史学におけるインテレクチュアル・ヒストリーと言い，ピューリタニズムと言い，ともに Perry Miller が一時期を画したことは言うまでもないが，大覚醒についての史料集がまず Perry Miller と Heimert によって出されたことは，大覚醒に対する関心の高まりの研究史的背景を物語るものであり，それが Miller 生前に Heimert と構想がたてられ，彼の死後刊行されたことは，大覚醒に対する今日の研究動向を象徴するかの如くである。 Heimert による序文はすぐれた論文とも言えるもので Perry Miller のニューイングランド精神の研究全体において，大覚醒が，いかなる意義をもつか解説したものと言える。

Perry Miller には，ニューイングランドにおけるピューリタニズムの発展を，そのアメリカ化としてとらえるという太い柱があった。アメリカの文化を構成する多くの思想的な要素は，ピューリタニズムという価値の体系としてアメリカにもたらされ，それがアメリカの風土の中で，初期の体系がくずれさり，土着の思想，あるいは精神として，ダイナミックな発展をとげて行く。 Perry Miller は大覚醒にピューリタニズムの転換点を見出し，その中心に，Jonathan Edwards の役割を位置づけたのであった。このようにして，Perry Miller は，エドワーズ研究に新しい関心を引きおこしたのであったが， Heimert は，Miller の後をうけて， Edwards によって代表される大覚醒の思想的発展が，アメリカ革命の論理をつらぬき，さらにそれが，アメリカン・デモクラシーの本流として，発展するというコントロヴァーシアルな研究を著わしたのである。 Alan Heimert, *Religion and the American Mind: From the Great Awakening to the Revolution* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1966). Heimert はこの書物において，大覚醒に対する反対派 (Old Lights) である理性重視のリベラルたちがアメリカ革命の先駆的な役割を主に果したという従来からの定説に挑戦した。 Heimert 説に対する賛否は相半ばする。しかし，直接に政治的関心をもたなかった，あるいはむしろそれを拒否した Edwards が，思想史的に，アメリカの政治・社会を動かす論理の原点を形づくったというとらえ方は，Perry Miller の Edwards あるいは大覚醒解釈の中にみられる観点を展開させたのであった。一方においてアメリカ革命の思想史的研究がさかんにすすめられている今日—Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1967) はその顕著な例としてあげることができる—，Heimert のこの業績が，大覚醒に対する関心を刺激しているのである。Rutman も本書において， Perry Miller はもちろんのこと Heimert の見解も大覚醒に関する "Exegesis" の代表的なものとして収録している。

大覚醒の史料を見ると，反対派の非難は，大覚醒がその感情中心の熱狂によって宗教と社会に混乱をもたらすという点に向けられているが， Heimert の見解によれば，このような反対派は，社会と宗教の秩序を擁護しようとする保守的立場である。さらにその立場は，宗教あるいは人々の精神を聖職者にゆだねるエリ

ーティズムであり，それに対して大覚醒派（New Lights）は聖職者も信徒も区別なく個人の宗教体験のみを中心としたデモクラシーを志向している。かかる見解自体は斬新なものではないが，Heimert は Miller によってすすめられた精神史的手法を用いて，大覚醒派の思想の中に新しいアメリカのユニティとミレニアムへの待望を読みとることによって，New Lights と Old Lights の対比的枠組を内実化しようとしたのである。大覚醒に見られるこのユニティとミレニアムの待望こそ，ピューリタニズムに胚胎する選民的使命感が，アメリカの国民によるアメリカにおける「神の国」の待望へと展開する過程として，捉えられる。このように見てくると Rutman が，このアンソロジーに，H. Richard Niebuhr の *The Kingdom of God in America* (New York, Harper and Row, Inc., 1937) からも収録している理由もうなずける。

以上のような思想史的アプローチに対して，実証的な社会史的研究からピューリタニズムとニューイングランド社会との関連を追求しようという傾向も，最近とみに顕著である。とくにこれは，ポスト　ペリーミラー期におけるピューリタニズム研究の中によくうかがえる。編者 Rutman は，この立場を代表する業績を著わしてきた一人である。*Winthrop's Boston: Portrait of a Puritan Town, 1630-1649* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1665) はその代表作である。大覚醒については，まだこのような立場からの包括的研究はなく，いくつかのケース・スタディーズによってこころみられている段階であるが，その一つとして Bumsted の論文が収録されている (J. M. Bumsted, "Revivalism in New England: The First Society of Norwich, Connecticut as a Case Study" *William and Mary Quarterly*, ser. 3, XXIV, 1967)。この論文は大覚醒に見られる対立が，宗教的理由よりもコミュニティー・ライフの多様なインタレスツによってひきおこされていることを示している。Miller の関心の中心であったピューリタニズムのアメリカ化も，このようなコミュニティーのライフ・パタンの変遷をとおしてさらに検討されていかなければならぬであろう。大覚醒は，その影響がコミュニティー・ライフによく反映されているので，かかる関心からの研究の対象としても重要視されてくる。本書に収録された Richard L. Bushman, *From Puritan to Yankee: Character and the Social Order in Connecticut, 1690-1765* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1967) も，この観点から大覚醒の意義を論じている。さてこのような社会史的アプローチは，思想史にとってかわることを意図しているのではなく，思想としてのピューリタニズムと，人々を行為にかりたてた直接のモチーフとの関連を明らかにしようと考えている。Rutman の序文にもこのような意欲がうかがわれる。本書の第一部に収録されている史料も，かかる問題を読者に考えさそうという編者の方針から選ばれたものと思われる。

ベトナム戦争の影響がアメリカの大学にもさまざまな反省を呼びおこしつつあった時，Rutman は本書を編集していた。かれは序文で現在のアメリカの課題を考えるとき，大覚醒期のアメリカ社会の対立や，その精神的高揚に見られる完全なアメリカへの期待というミレニアムなどを，アメリカの伝統として見なおすことに意義を見いだしている。これは，われわれにとっても，興味深い問題であろう。

（同志社大学文学部教授）